

本格的な実践を控え、
充実の準備を

外国語活動・ 教科化の全て

新学習指導要領による小学校外国語活動・外国語科のスタートが間近に迫ってきました。求められることは何かを改めて確認し、先行事例も参考に、学校で、あるいは個人で、これから取り組むべきことについて考えていきましょう。

取材・文 ● 甲斐ゆかり(サード・アイ) イラスト ● あきんこ



小学校外国語教育 導入の経緯

中央教育審議会答申など

1992～2001年	研究開発学校での英語教育(英語活動)	1993年 外国語教育の改善に関する調査研究協力者会議
2002～2010年	「総合的な学習の時間」の中での英語教育(英語活動)	2002年 『英語が使える日本人』育成のための戦略構想
2011～2019年	英語教育必修化(外国語活動)	2013年 教育再生実行会議(第3次提言) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画
		2014年 英語教育の在り方に関する有識者会議提言
		2016年 中教審次期学習指導要領答申
		2017年 新学習指導要領告示
2020年～	英語教育教科化(外国語活動・外国語)	

(文部科学省資料より)

小学校外国語は「全く新しい教科」として始まる

2020年度の小学校新学習指導要領全面实施によって、小学校中学年では外国語活動が始まり、高学年では外国語が正式に教科化されます。2018年度から2020年度までの2年間は移行措置期間とされ、この期間に「先行実施」をしている学校もありました。

小・中学校の7年間を通して、英語教育では、「聞くこと・読むこと・話すこと(やり取り・発表)・書くこと」の4つの技能と5つの領域をバランスよく身

につけることが求められています。その中で、小学校中学年では「聞くこと」「話すこと」「やり取り」「話すこと」「発表」の3領域、高学年では、これに「読むこと」「書くこと」が加わり、5領域を扱うこととなります。教科化する高学年の外国語科には2領域が加わりますが、小学校外国語はあくまで音声中心ということ、「読むこと」や「書くこと」で扱うのは「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現」であることに、注意が必要です。

高学年の教科化によって、次の三つが大きく変わります。

① 文字学習(書くこと・読むこと)

「書くこと」では、アルファベットの「書くこと」ではアルファベットの名前を正しく読み上げることや音声で慣れ親しんだ語句や表現の綴りを見て、意味がわかることなどが求められます。アルファベットの音読み(Aを「エイ」ではなく「ア」と読むこと)にも触れることになります。

② 新しい表現

三人称主語の he と she や、動詞の過去形の一部などを小学校で新たに扱います。

しかし、小学校では、例えば「go」の過去形は「went」というような、明示的な文法指導は行いません。仕組みを教え込むのではなく、コミュニケーション活動を行う中で、児童の気づきを促すことが大切です。

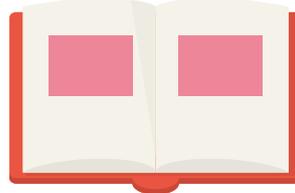
小学校の外国語はこう学ぶ

● 小学校から中学校へのつながりは

小学校中学年	小学校高学年	中学校
「聞く」 「話す(やり取り・発表)」 2技能3領域	「聞く」 「話す(やり取り・発表)」 「読む」 「書く」 4技能5領域	4技能5領域を総合的に扱う
600～700語	600～700語+ 1600～1800語 =2200～2500語	
3人称主語 he/she 不定詞 want to 動名詞、過去形などに触れる	左記+現在完了進行形、 仮定法などをしっかり 使って定着まで求める	

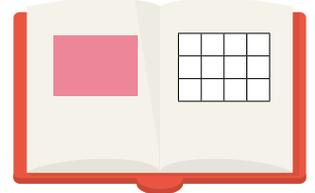
● 教科書は(展開例)

① 単元テーマ・場面設定



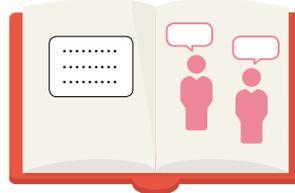
- ▶ 音声や映像で場面を確認
- ▶ ゲームを通じて表現に慣れ親しむ

② 短い会話に慣れる



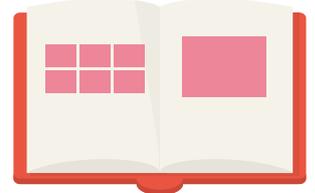
- ▶ 読まれた英語を聞く活動
- ▶ 慣れ親しんだ表現を読む、書く活動

③ 英語でやり取りする



- ▶ カードを使ったマッチングゲーム
- ▶ 話す役と聞く役を交替して練習

④ 発表する・英語で表現する



- ▶ 調べたことを英語で表現する
- ▶ ポスターを作って発表する など

● 概要は

学年	3・4年	5・6年
授業時数	週1コマ年間 35単位時間	週2コマ年間 70単位時間
学ぶ領域	聞くこと	聞くこと
	話すこと(やり取り)	話すこと(やり取り)
	話すこと(発表)	話すこと(発表)
		読むこと
		書くこと
	の3領域	の5領域
評価	記述式による評価を行う	一般の教科と同様に3段階で評価する

■ 小学校での文構造の扱いについて

「主語+動詞」「主語+動詞+補語」のうち、「主語+be動詞+名詞・代名詞・形容詞」
「主語+動詞+目的語」のうち、「主語+動詞+名詞・代名詞」を扱う。

■ 小学校での文の扱いについて

「単文」「肯定、否定の平叙文」「肯定、否定の命令文」「疑問文のうちbe動詞や助動詞(can doなど)で始まるもの、疑問詞で始まるもの」「代名詞のうち、I, you, he, sheなどの基本的なものを含むもの」「動名詞や過去形のうち、活用頻度の高い基本的なものを含むもの」を扱う。



③ 語彙

小学校で外国語を学ぶ4年間のうちに、およそ600～700語を取り扱うこととなります(これまでの外国語活動では約400語)。しかし、この数は、聞く・読むにあたって意味が理解できればよい「受容語彙」と、話す・書くにあたって自分のことを表現するために使えるようにするべき「発信語彙」を合わせた数です。したがって、この600～700語全てを暗記させる必要はありません。

近年、英語教育の早期化に注目が集まっているところから、「小学校外国語は、中学校で学ぶ内容の前倒しである」と受け止める向きがあります。しかし、細かくみていくと、無機質な学習にならないよう、実際のコミュニケーションを強く意識していることがわかります。小学校中学年から中学校まで、目標が系統立てられているのもポイントです。

小学校外国語の指導のポイント

小学校外国語は、これまでの英語教育とは大きく異なる「全く新しい教科」として位置づけられていると言えます。

小学校外国語では、英語で伝え合う目的や、必然性のあるコミュニケーションを重視します。

中学年外国語活動におけるコミュニケーションの対象は「相手(＝目の前の人)」ですが、高学年外国語科では、「他者(＝目の前の人+a)」になります。

段階的にコミュニケーションの対象が変化していくため、その時々に応じた場面の設定や言語活動が求められます。従来の英語学習のような、文法事項ありきの単純な反復練習ではなく、英語で伝え合う必然性のある言語活動を通して、コミュニケーション能力の素地・基礎を育てることが大切です。





白石裕彦先生

Hirohiko Shiraiishi

港区立白金小学校教諭、「国際科(小学校英語)」専科担当。文部科学省・東京都英語教育推進リーダー。

実践からヒントを得よう

小学校での外国語導入の流れを捉えたら、続いて先行実践を進めている学校の例を見てみましょう。ここでは、東京都港区立白金小学校の授業の様子をご紹介します。

4年生

「アルファベットで遊ぼう」

1 帯活動「Don't sing」



▲子どもたちに「What fruit do you like?」と語りかけて出てきた返答の中から「orange」をピックアップ。この6文字以外でABCの歌を歌います。



▲該当するアルファベット以外を歌います。やってみると意外と難しい……。

①子どもたちに対して、教師は、学級担任、専科の白石先生、ALT(港区ではNT: Native Teacher)の3名で指導します。授業中、先生の指示や会話は英語を中心としていますが、必要に応じて日本語も使うようにしています。



2 アルファベットすごろく

「E」!
どう、Eに見えろ?

▶今日は、テキスト中の「アルファベットすごろく」をやります。ペアになり、じゃんけんをして、進んだコマに書かれたアルファベットの形を、体を使って表現します。



▲実践は2分半。テンポよくスピーディーに進みます。

②教材は、「Let's Try!」の他に、港区独自のものなども併せて使います。



3 ローマ字クイズ



▲次は単語当てクイズ。お店役は、クイズに出す言葉(日本語)を9個考えて表に記入します。お客役はその表を見ながら、何文字目にどのアルファベットがあるかを質問し、正解を探していきます。



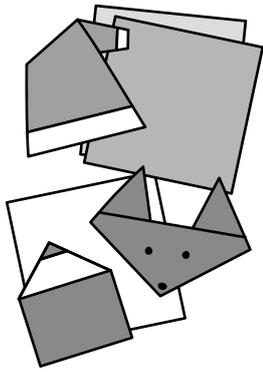
◀つい単語だけの会話になりそうなところを指導します。



正しい表現で言えたか、アルファベットは正しく聞き取れたかを振り返り、終わりのあいさつです。

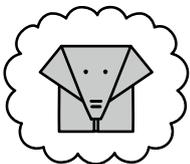
③「Let's Try!」では色を表す英単語を出題する内容になっていますが、それだと問題のバリエーションが少なくなってしまうため、答えは日本語(ローマ字)にアレンジ。これで3年生の国語で学習したローマ字の復習もできます。しかし、やり取りは英語を使います。





②観ているのは、ニュース番組のあるコーナー。折り紙の良さが海外で注目され、手先の器用さや集中力を鍛える教室が開校されていること、椅子やカバンなどのデザイン雑貨や、小型ロボット、宇宙工学にも応用されているという内容でした。

●この時間の内容は、学校オリジナルのもの。1年生のときに英単語で動物・色を選んで折り紙を折る活動をした後、4年生では、1年生に英語で折り紙を教える活動を行います。他にも、学年をまたぐ合同授業が多く設けられています。



4年生

「折り紙を教えよう」

① 帯活動「Don't sing」



▲導入。前のクラスと同じく、英語で話しかけます。子どもたちからはいろんな果物が。今回は、grapesをピックアップ。



② 折り紙を教えよう



▲折り紙をもつ先生。

▶この時間は、外国人への折り紙の説明の仕方を学びます。日本の文化である折り紙が海外で注目されていることを紹介したビデオを観ます。

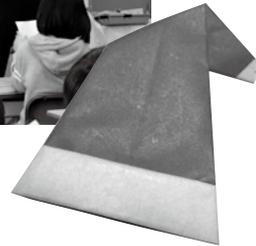


POINT 1

Fold like this.



▲今日は、サンタクロースの帽子を作ります。工程ごとに、英語での表現と写真をスライドで映しながら、全員で一斉に折り進めます。ここでは、3つの表現がポイントになります。



▲完成したサンタハットを、顔のりんかくが描かれたシートに貼り、髪や目などを自由に描きます。

東京都港区の公立小学校では、2002年度から、国際理解教育の一環として英語活動を実施してきました。2007年度からは全校に「国際科」を開設。各校に外国人講師（NT:Native Teacher）を配置し、英語による実践的コミュニケーション能力の基礎を培っています。白石先生は、十年以上学級担任をされた後、2016年度から専科として指導にあたっています。

現在、国際科の授業は全学年で週2回実施されています。副教材に加え、東京都の教材「Welcome to Tokyo」や港区

の教材「Tomorrow」の3冊を使用し、内容に合わせた様々な教具も併せて用いながら授業を行っています。

授業は、担任、NT、専科と3名でやるのが特徴です。人数をかけることできめ細やかな指導ができ、子どもたちがコミュニケーションをとる機会を多くできます。また、専科の教師がいることで、担任は、教材準備の負担が減り、授業に専念できるメリットがあります。指導をしながら純粋に一緒に楽しむことができることも大きな特徴と言えます。

外国語・外国語活動の評価

指導と評価の 充実のために

外国語活動・外国語科の指導・評価について、不安を抱える先生方の声も多く寄せられています。白石先生にお話を伺いました。

新学習指導要領をふまえ、各教科における観点別学習状況の評価の観点は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つに整理されています。これらの観点は、毎回の授業全てで見取るのではなく、単元や題材を通じてまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てていくことが重要です。

評価については、一般的に次の考え方や手法が用いられます。

* 評価方法の工夫……活動の観察やパフォーマンス評価（インタビュー、授業内の発表、ワークシートや作品等の評価）など、多様な評価方法から学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価する。

* 評価時期の工夫……毎回の授業で

全てを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で行う。

5・6年は、教科化にあたって検定教科書を使用することになります。各社の教科書には、学期に1回程度、パフォーマンステストが設けられています。それまでの活動をもとに、自己紹介やインタビュー等をグループや個人で行う、といった内容になっています。教科化されるにあたって、このような評価を意識するための機会が、教科書内に設けられたことをおさえます。

教科化された5・6年の外国語は一般の教科と同様に、数値による3段階の評価を行います。一方、3・4年の外国語活動は、記述式による評価を行います。



▲「国際科」の授業は週2回なので、文科省発行の共通版だけでは授業で扱う内容が不足します。そこで、都とNHKが共同で製作したものの、港区独自のもの、併せて3冊を使用。学年や内容に合わせて使い分けています。

評価をどう工夫するか

小・中・高を通して言えることですが、とりわけ音声为主体となる小学校外国語活動・外国語の授業では、記録が残りにくく、観察が難しいという特性があります。そこで本校では、数年前から少人数指導を導入し、担任、専科、Native Teacher (NT)、いわゆるALT)の3人体制で授業を進めています。この体制でチーム・ティーチング(以下TT)をしたり、クラスを半分に分けたりして、一人が担当する子どもの数を減らしています。TTによって、教師は複数の目で子どもを観察するので、取りこぼしも減ります。

教員の配置や、その他の状況によって難しい場合は、一度の授業時間内で見取りだけで評価するのではなく、複数の時間をかけてまんべんなく見るといったスタンスを取るとよいでしょう。

今回、「評価」の考え方や観点が新たに示されました。評価は児童の成長のために行うことや指導の改善につなげることが強調されています。また、形式的ではなく、現実的な評価をするところもポイントです。そのためにはどうすべきか。子どもたちの学習をしっかりと見取り、すぐに評価することです。この「即時評価」が大切だと考えています。記録簿なども活用しながら、子どもの様



子をとらえ、次の指導にも活かすようにしています。高学年ではパフォーマンステスト等も行っています。教室には、英語ができる子がいれば、当然そうでない子もいます。大切なのは、どちらも一緒に活躍できるように課題にすること、そして、子どもたちが協力し合い、「教え合い」「学び合い」が生まれるような活動にすることでしょうか。

そして、英語が「好き」「楽しい」と感じられるように、英語を通して、世界の様々な国や文化などに触れ、自分の世界が広がるということを折に触れて話したり、多様な立場の人たちから、英語をどう使っているか話を聞いたりするなどの体験を用意できるとよいですね。

実践に役立つあれこれ

指導にすぐに生かせる情報の「引き出し」を多くっていると、日ごろの指導にもゆとりが生まれます。ここでは、いろいろなお役立ち情報をまとめました。



小学校外国語授業づくり研究会



URL <https://gaikokugolesson.amebaownd.com>

白石先生主宰の、小学校外国語科・外国語活動のよりよい授業づくりのための研究会。特別顧問には、上智大学吉田研作先生、岐阜聖徳学園大学加藤拓由先生が就任されています。毎月セミナーや交流会、勉強会等を行っており、これまで全国からのべ500名もの先生方が参加されています。HPでは、全国の研修情報や教材情報が紹介も。会員専用のオンラインサロンでは、セミナーの映像を閲覧することができ、全国の先生方に利用されています。

■今後のセミナー・勉強会の予定(2020年4・5月)

- 4.12 (日) 2h選択制 『4月教科書別授業づくり勉強会』
- 4.26 (日) AM 2020年4月セミナー「1学期を見通そう」
- 5.2 (土) 2h選択制 『5月教科書別授業づくり勉強会』
- 5.10 (日) AM 2020年5月セミナー「5月単元特集」
- 5.17 (日) 2h選択制 『6月教科書別授業づくり勉強会』

授業研究に役立つサイト

■文部科学省チャンネル

「日本の外国語教育はこう変わる!」

URL <https://www.youtube.com/watch?v=ZTx9qC80nIA>

「発音トレーニング」

URL <https://www.youtube.com/watch?v=jcQw7aRW1IE>



▲文部科学省の公式Youtubeサイトには、指導に役立つ様々な動画がアップされています。一日のどこかの時間帯を、このような情報のチェックにあてるのもよいでしょう。

■NITS独立行政法人 教職員支援機構校内研修シリーズ

URL <https://www.nits.go.jp/materials/intramural/>

■英語の先生応援サイト

Learning Teachers' and Advisors' Forum (LTAF)

URL <https://teacher.alc.co.jp>



▲英語の先生を応援するサイト。会員登録をしなくても利用できるコンテンツもあります。

力量アップのための民間資格

●小学校英語指導者

小学校での英語教育の普及・発展を支援するという趣旨のもとに民間主導で設立されたNPOが資格認定を行っています。所定の研修を受講すれば、「小学校英語準認定指導者資格」「小学校英語指導者資格」「小学校英語指導者資格プラス」の3種の認定が受けられます。

●児童英語インストラクター

一般財団法人日本能力開発推進協会が認定する、幼児から小学生の英語教育のスペシャリスト資格。通信教育等で所定のカリキュラムを修了して受験し、合格すれば「児童英語インストラクター」の認定が得られます。

●CELT-P (小学校英語指導者用サーティフィケート)

ケンブリッジ大学英語検定機構が認定する英語教授法の資格。小学生を含む4歳から11歳に英語を教えている先生のスキルを向上させたい学校や政府、教育委員会等を対象に、オンラインで学ぶことができます。認定は試験と授業観察で行います。

▶評価の手立てとしてお使いいただけます

外国語科の評価に役立つ教材を各社発行しております。

※新学社英語期末テストの紙面

